# 級友からの受容と教師からの受容に関連する性格特性
## ―小学生と中学生の比較―

肥田知里*・石田靖彦**
*半田小学校　**学校教育講座（心理学）

# Relations between Student's Personarity, Peer Acceptance and Teacher Acceptance. Comparison between Elementary and Junior High School Students.

Chisato HIDA*　Yasuhiko ISHIDA**

**Handa Elementary School, Handa 475-0877, Japan*
***Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

**要約**　本研究の目的は，第一に，教師からの受容と級友からの受容がクラスでの居心地感に与える影響についての発達的変化を検討すること，第二に級友からの受容と教師からの受容に関連する性格特性について発達的な変化を検討することであった。小学校 4，5，6 年生，中学校 1，2，3 年生の計 1281 名を対象に質問紙調査を行ったところ，小学校では男女とも教師受容と級友受容が居心地感に影響を及ぼし，中学校では男女とも級友受容が居心地感に影響していることが示された。教師からの受容，級友からの受容に関連する性格特性については，小学校，中学校のいずれも，協調性が影響していることが示された。一方，中学校では教師受容に知的好奇心は影響していないが，小学校では女子において知的好奇心が教師受容に影響するという結果が得られ，学校種の特徴の違いも示された。さらに，知的好奇心は級友受容だけでなく，小学校男女，中学男子において級友受容にも影響を与えていることが新たに示された。級友受容には，良識性が影響していることが示され，何事にも前向きに取り組んだり，責任をもったりする態度は級友からの受容につながりやすいことが明らかになった。他方，良識性は教師受容には影響しておらず，教師は良識性のある子どもたちを積極的に評価していない，あるいは評価はしているものの子どもたちに伝わっていない可能性が示唆された。
**キーワード**：　性格特性，教師受容，級友受容，居心地感，小学生，中学生

## 問題と目的

### 児童生徒の学級適応とクラスにおける居心地感との関連

近年，いじめや不登校など学校における適応の問題が取り上げられるようになってきた。例えば，平成 28 年度における文部科学省の調査によると，小学校で 0.48%，中学校で 3.01%が不登校の状況であると報告されている（文部科学省, 2017）。全学年で前年度を上回り，上昇傾向にあることが明らかにされている。また, 古市（1991）は，登校はしているものの，学校に対して忌避的な感情を抱いている子どもたちは少なくないことを指摘している。また，学級集団への適応は子どもの人格形成にも影響を与えることも指摘されている（岡本，1999）。したがって，学校への適応は児童・生徒にとって重大な問題となると考えられる。

学校に通う児童生徒は，学級という集団に所属し，教師や友人との関わりの中で学校生活を送る。学校生活におけるほとんどの時間を所属するクラスの中で過ごすため，クラスでの居心地は，児童生徒にとって学校生活を送る上で重要なポイントとなる（鈴木，2012）。また，前田（1994）は，一定の期間にわたって同じ学級に所属する子どもたちにとって，自分が友だちからどの程度受容されているかは重要な意味をもつとしている。これらの研究より，クラスにおける居心地感が児童生徒の学校への適応に大きく影響しているといえる。

では，クラスにおける居心地感に影響を及ぼす要因は何なのだろうか。その要因の一つに，教師，級友からの受容感が挙げられる。古市（2004）は，小中学生を対象に，学校生活享受感情の規定要因について検討を行った。その結果，級友適応，教師適応が学校生活享受感情の重要な規定要因であることが示された。具体的には，小学生においては，友人及び教師との関係，中学生においては友人との関係の良し悪しが学校生活の楽しさに影響を及ぼすことを明らかにした。また, 藤田・西川（1999）は，小中学生を対象に，他者からの受容感が児童生徒の学校適応感に及ぼす影響について検討を行った。その結果，児童生徒にとって学校生活での重要な他者とは，先生と友だちであり，教師や友だちからの受容感が高いほど学校適応感が高いことが示された。特に女子においては，友だち関係が学校適応感に強く影響していることが明らかとなった。これらの研究から，教師や級友からの受容が児童生徒のクラスにおける居心地感に影響を与えることが予想される。

また古市（2004）は，学校生活享受感情は，小学生から中学生にかけて低下すること，享受感情得点は男子よりも女子の方が高いことを明らかにしている。小学校と中学校とでは，環境の違いから，教師や級友との関わり方や重要性が異なると考えられる。教師や級友からの受容感が居心地感に与える影響は，学校種や性別により異なることも考えられる。

そこで本研究では，教師や級友からの受容がクラスでの居心地感に与える影響の発達的変化を男女別に検討することを第一の目的とする。学年を経るごとに重要とする他者は変化するし，教師や友人からの影響には男女差があると考えられる。そのため，居心地感に与える影響の発達的変化を学校種別，男女別に再検討することは，教育活動を進めていく上で意味のあることだと考えられる。

**級友・教師からの受容と児童生徒の性格特性**

これまで様々な研究で，学級集団内における仲間関係と性格特性との関係が検討されてきた。例えば，松山（1963）は，学級集団内の仲間の選択と児童の性格特性との関連を検討した。その結果，児童が学級集団の仲間の選択に対する判断基準には，「協調と責任感」，「社交性と積極性」が挙げられることを明らかにした。また，高橋（1988）は，学級集団における友人選択傾向と性格特性に関する研究を行った。その結果，被選択と非協調性は負の相関関係にあることが示された。さらに，小石・片山・八幡・長瀬（1993）は，仲間からの被選択と対人態度や対人行動との関係を検討した。そして，人気児は「積極的友好性」が高く，拒否児は「積極的友好性」「協調的友好性」「積極的かかわり」が低いことを示している。

これらの研究から，学級集団の仲間の選択や受容には，個人が持つ性格や行動特性が関係しているといえる。そのため，本研究の第二の目的は，教師や級友からの受容と児童生徒の性格特性との関連の検討とする。また，従来の社会的地位に関する研究は古いものが多いため，現在の実態を反映した研究を行う必要があるといえる。

**従来の研究の問題点と本研究の目的**

これまでの学級集団の中で好まれる児童生徒の性格特性について検討した研究では，児童生徒同士の交友関係の構造を明らかにしてきた。しかし，教師からの受容について検討していない点，学校種を超えた検討はなされていない点に問題があるといえる。明石（1995）は，小学校 5・6 年生と小学校教員を対象に人気者の特徴について検討した。そして，児童から人気がある児童の姿と教師が好む児童の姿にはズレがあることを指摘している。具体的には，児童は，話が面白くみんなを笑わせるのがうまいひょうきんな人柄の児童を好み，一方で教師は，思いやりがあり他人に優しく，教室での正義と秩序を守る児童を好むとしている。さらに，弓削・甘利（2004）は，教師と児童では肯定的に評価する児童が異なることを明らかにした。具体的には，教師は，クラス全体をまとめたりクラスの雰囲気を和らげたりするなど，教師の権威的立場を認める行動をとる児童を肯定的に評価する。それに対して，児童は，勉強やスポーツなどで得意な分野があり一目置かれているような，教師からは独立した立場にある児童を肯定的に評価することを示した。

これらの研究の結果から，児童から好まれる児童と，教師から好まれる児童は異なる可能性があると言える。そのため，教師からの受容を感じている児童生徒が，必ずしも級友からも同様であるとは限らないと考えられる。

したがって，本研究では，級友からの受容のみを取り上げるのではなく，教師からの受容という観点も加えることとする。そして，級友からの受容と教師からの受容にはどのような性格特性が関連しているのかについて検討する。

また，仲間から受け入れられる児童の行動側面について，発達的な検討を行った研究がある。前田（1999）は，小学 1 年生から 6 年生までの 6 学年を対象とし，攻撃性，社交性，引っ込み思案の 3 つの行動側面が仲間からの受容にどのような影響を及ぼすのかについて発達的に検討を行った。その結果，発達差はみられず，仲間から好まれる行動特徴は一貫して社交性であり，仲間から拒否される行動特徴は一貫して攻撃性であることが明らかになった。しかし，その後の中学校に焦点を当てた検討や，学校種を超えた発達段階に着目した検討はほとんどなされていない。

したがって，本研究では，小学生と中学生を対象とし，級友からの受容や教師からの受容に関連する性格特性の発達的変化について検討を行う。どのような性格特性と教師や級友からの受容が関連をするのかを発達的に検討を行うことは子どもの特徴に応じた支援を考えるうえで重要である。

以上より，本研究では，第一に，教師からの受容と級友からの受容がクラスでの居心地感に与える影響の性差及び発達的変化を検討することを目的とする。また，級友からの受容と教師からの受容に関連する性格特性の性差及び発達的変化について検討することを第二の目的とする。

## 方　法

**調査対象者と調査時期**

公立小学校 2 校，公立中学校 2 校の計 4 校に調査の依頼をし，校長先生の許可を得た上で調査を実施した。質問紙の実施に際しては，質問紙調査の表紙に，調査は無記名であり個人が特定されることはないこと，個人の回答が先生や友人，家族に知られることはないこと，回答したくない場合は回答しなくて良いこと，研究以外には用いないことなどを記載した上で，担任教師からも同様の教示を行い，同意してくれた児童生徒のみに集団場面

で実施した。

小学校 4，5，6 年生，中学校 1，2，3 年生の計 1281 名を対象に質問紙調査を行い，データに欠損のあった 18 名を除いた計 1263 名（男子 641 名，女子 622 名）を分析の対象とした。調査は 2013 年 9 月下旬から 10 月にかけて実施した。

**調査内容**

（1）性格特性測定尺度

小学生用主要 5 因子性格検査（村上・畑山，2010）の尺度の中から 24 項目を抽出し，表現に修正を加えて使用した。村上・畑山（2010）では，外向性，協調性，良識性，情緒安定性，知的好奇心の主要５因子に攻撃性を加えた 6 つの因子で性格特性の測定を行っている。本研究ではこれを踏襲し，攻撃性を加えた６つの性格特性を測定した。回答は，「5：あてはまる」「4：すこしあてはまる」「3：どちらともいえない」「2：あまりあてはまらない」「1：あてはまらない」までの 5 件法であった。

（2）教師からの受容・級友からの受容尺度

児童生徒が，教師や級友から受け容れられていると感じるかどうかを測定する尺度を現場の先生方からの助言に基いて作成した。教師からの受容測定尺度は「担任の先生から認められている」「担任の先生から頼りにされている」「担任の先生は自分の意見をきちんと聞いてくれる」の 3 項目であった。

級友からの受容測定尺度は，教師からの受容測定尺度の文頭を「このクラスのみんなから」に変えた 3 項目であった。回答は，「5：あてはまる」「4：すこしあてはまる」「3：どちらともいえない」「2：あまりあてはまらない」「1：あてはまらない」までの 5 件法であった。

（3）クラスでの居心地感尺度

小学生用学級適応感尺度（江村・大久保，2012）を参考にして，「このクラスにいると安心する」「このクラスにいると気持ちが楽になる」といった，児童生徒が，クラス内でどの程度居心地の良さを感じているかを測定する 4 項目の尺度を作成した。回答は，「5：あてはまる」「4：すこしあてはまる」「3：どちらともいえない」「2：あまりあてはまらない」「1：あてはまらない」までの 5 件法であった。

## 結　果

**１．尺度の検討**

性格特性に関する 24 項目について主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況は，4.53，2.83，2.26，1.56，1.41，1.03，0.89・・・であり，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から 6 因子解が適当であると判断した。因子負荷量が低いものもみられたが，小学生用主要 5 因子性格検査とほぼ同様の因子が抽出されたため，原尺度通りの下位尺度でそれぞれの下位尺度の合計得点を算出した。各下位尺度のα係数は，「協調性」が.79，「攻撃性」が.74，「知的好奇心」が.67，「良識性」が.70，「外向性」が.67，「情緒安定性」が.58 であった。一部でα係数の値が高いとはいえないが，一応の信頼性が確認された。

教師からの受容・級友からの受容に関する 6 項目について主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況は，3.59，0.81，0.69，0.36・・・であったが，教師からの受容と，級友からの受容を分類するため，２因子解とすることにした。そこで，当該因子のみに.40 以上の因子負荷をもつ各３項目で下位尺度を構成し，その項目平均を教師受容得点，級友受容得点とした。下位尺度のα係数は，「教師受容」が.79，「級友受容」が.80 であり，信頼性が確認された。

さらに，クラスでの居心地感に関する 4 項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況は，3.25，0.31，0.28・・・であり，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から 1 因子解が適当であると判断した。4 項目の項目平均を算出し，クラスでの居心地感得点とした。α係数は.93 であり，信頼性が確認された。

**２．教師受容・級友受容・居心地感得点の性差と学年差の検討**

教師からの受容得点の学年差及び性差を検討するために，性別と学年を独立変数とし，教師受容得点を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果を Table １に示す。

Table 1　教師受容，級友受容，居心地感の性別，学年別の平均値と標準偏差

| | 小4 ($n$=193) | | 小5 ($n$=166) | | 小6 ($n$=190) | | 中1 ($n$=248) | | 中2 ($n$=229) | | 中3 ($n$=237) | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 男子 ($n$=103) | 女子 ($n$=90) | 男子 ($n$=77) | 女子 ($n$=89) | 男子 ($n$=93) | 女子 ($n$=97) | 男子 ($n$=142) | 女子 ($n$=106) | 男子 ($n$=114) | 女子 ($n$=115) | 男子 ($n$=112) | 女子 ($n$=125) |
| 教師受容 | 3.10 | 3.56 | 2.86 | 3.16 | 3.12 | 3.22 | 3.19 | 3.18 | 2.90 | 3.06 | 2.98 | 3.15 |
| | (0.96) | (0.84) | (1.13) | (1.17) | (0.87) | (0.84) | (0.93) | (0.77) | (0.93) | (0.90) | (0.88) | (0.79) |
| 級友受容 | 2.91 | 3.12 | 2.70 | 2.98 | 2.84 | 3.14 | 2.82 | 3.00 | 2.82 | 2.90 | 2.80 | 2.95 |
| | (0.99) | (0.87) | (1.17) | (1.02) | (0.82) | (0.77) | (0.93) | (0.81) | (0.86) | (0.80) | (0.83) | (0.73) |
| 居心地感 | 3.71 | 3.61 | 3.30 | 3.50 | 3.59 | 3.63 | 3.59 | 3.46 | 2.82 | 3.31 | 3.44 | 3.62 |
| | (1.12) | (1.15) | (1.37) | (1.23) | (1.07) | (1.01) | (1.05) | (1.10) | (1.06) | (1.10) | (0.98) | (1.09) |

注）カッコ内は標準偏差

分散分析の結果，性別の主効果がみられ，男子に比べて女子の方が有意に高いことが示された（$F$（1，1251）= 14.29，$p$ < .001）。学年による主効果もみられ（$F$（5，1251）= 4.18，$p$ < .01），Tukey の HSD 法による多重比較の結果，小 4 は中 2 に比べて有意に高く（$p$ < .01），小 5 と比べても有意に高いことが示された（$p$ < .05）。交互作用は有意でなかった（$F$（5，1251）= 1.70，*ns.*）。

級友からの受容得点の性差および学年差を検討するために，学年と性別を独立変数とし，級友受容得点を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果，性別の主効果がみられ，男子に比べて女子のほうが有意に高いことが示された（$F$（1，1251）= 15.64，$p$ < .001）。学年による主効果はみられず，交互作用も有意でなかった（$F$（5，1251）= 0.45，*ns.*）。

クラスでの居心地感得点の性差および学年差を検討するために，学年と性別を独立変数とし，居心地感得点を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果，性別による主効果はみられなかった。学年による主効果はみられ（$F$（5，1251）= 3.10，$p$ < .01），Tukey の HSD 法による多重比較の結果，小 4 は中 2 に比べて有意に高いことが示された（$p$ < .05）。交互作用は有意でなかった（$F$（5，1251）= 0.98，*ns.*）。

**３．教師受容・級友受容が居心地感に及ぼす影響の検討**

教師からの受容，級友からの受容が居心地感に及ぼす影響を検討するために，教師受容得点，級友受容得点を説明変数，居心地感得点を基準変数とし学校種別かつ男女別に重回帰分析（強制投入法）を行った。重回帰分析の結果は Table２に示した。

小学校男子では，教師受容（$\beta$ = .32，$p$ < .001）と級友受容（$\beta$ = .38，$p$ < .001）いずれにおいても有意な正の影響が認められた。小学校女子でも，教師受容（$\beta$ = .16，$p$ < .05）と級友受容（$\beta$ = .50，$p$ < .001）で有意な正の影響が認められた。

中学校男子では，級友受容（$\beta$ = .56，$p$ < .001）において有意な正の影響が認められた。中学校女子でも級友受容（$\beta$ = .66，$p$ < .001）において有意な正の影響が認

Table２　居心地感に関する重回帰分析結果

| | 小学男子 | 小学女子 | 中学男子 | 中学女子 |
|---|---|---|---|---|
| | $\beta$ | $\beta$ | $\beta$ | $\beta$ |
| 教師受容 | .32 *** | .16 * | .08 | -.02 |
| 級友受容 | .38 *** | .49 *** | .56 *** | .66 *** |
| $R^2$ | .40 *** | .38 *** | .38 *** | .42 *** |

注）***$p$ < .001，*$p$ < .05

Table３　教師受容に関する性格特性の重回帰分析結果

| | 小学男子 | 小学女子 | 中学男子 | 中学女子 |
|---|---|---|---|---|
| | $\beta$ | $\beta$ | $\beta$ | $\beta$ |
| 協調性 | .31 *** | .20 ** | .28 *** | .28 *** |
| 攻撃性 | -.15 * | -.16 * | -.10 | -.04 |
| 外向性 | .10 | .21 *** | .04 | .03 |
| 知的好奇心 | .11 | .27 *** | .14 * | .10 |
| 良識性 | .04 | .07 | .07 | .11 |
| 情緒安定性 | -.05 | -.09 | .02 | -.06 |
| $R^2$ | .24 *** | .30 *** | .20 *** | .16 *** |

注）***$p$<.001，**$p$<.01，*$p$<.05

Table４　級友受容に関する性格特性の重回帰分析結果

| | 小学男子 | 小学女子 | 中学男子 | 中学女子 |
|---|---|---|---|---|
| | $\beta$ | $\beta$ | $\beta$ | $\beta$ |
| 協調性 | .29 *** | .28 *** | .22 *** | .37 *** |
| 攻撃性 | -.13 * | -.08 | -.19 *** | -.06 |
| 外向性 | .18 ** | .24 *** | .19 *** | .13 * |
| 知的好奇心 | .19 ** | .24 *** | .17 ** | .03 |
| 良識性 | .08 | .07 | .08 | .14 ** |
| 情緒安定性 | -.08 | -.05 | .06 | .03 |
| $R^2$ | .33 *** | .32 *** | .29 *** | .26 *** |

注）***$p$<.001，**$p$<.01，*$p$<.05

められた。教師受容については男女とも有意な影響は認められなかった。

教師受容については，小学校に比べて中学校のほうが居心地感に及ぼす影響が弱いことが示された。

**４．教師受容・級友受容に関連する性格特性の検討**

教師からの受容に関連する性格特性の検討を行うために，教師受容得点を説明変数，各性格得点を基準変数とし学校種別かつ男女別に重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果を Table３に示す。

重回帰分析の結果から，小学校男子では協調性（$\beta$ = .31，$p$ < .001）において有意な正の影響，攻撃性（$\beta$ = -.15，$p$ < .05）において有意な負の影響が認められた。小学校女子では協調性（$\beta$ = .20，$p$ < .01），外向性（$\beta$ = .21，$p$ < .001），知的好奇心（$\beta$ = .27，$p$ < .001）において有意な正の影響，攻撃性（$\beta$ = -.16，$p$ < .05）において有意な負の影響が認められた。中学校男子では協調性（$\beta$ = .28, $p$ < .001），知的好奇心（$\beta$ = .14, $p$ < .05）において，中学校女子では協調性（$\beta$ = .28，$p$ < .001）において有意な正の影響が認められた。

さらに，級友からの受容に関連する性格特性の検討を行うために，級友受容得点を説明変数，各性格得点を基準変数とし学校種別かつ男女別に重回帰分析（強制投入法）を行った。結果を Table４に示す。

小学校男子では協調性（$\beta$ = .29，$p$ < .001），外向性（$\beta$ = .18，$p$ < .01），知的好奇心（$\beta$ = .19，$p$ < .01）において有意な正の影響，攻撃性（$\beta$ = -.13，$p$ < .05）において有意な負の影響が認められた。小学校女子では協調性（$\beta$ = .28, $p$ < .001），外向性（$\beta$ = .24, $p$ < .001），知的好奇心（$\beta$ = .24，$p$ < .001）において有意な正の影響が認められた。中学校男子では協調性（$\beta$ = .22，$p$ < .001），外向性（$\beta$ = .19，$p$ < .001），知的好奇心（$\beta$ = .17，$p$ < .05）において有意な正の影響が認められ，攻撃性（$\beta$ = -.19，$p$ < .001）において有意な負の影響が認められた。中学校女子では協調性（$\beta$ = .37, $p$ < .001），外向性（$\beta$ = .13，$p$ < .05），良識性（$\beta$ = .14，$p$ < .01）において有意な正の影響が認められた。

## 考　察

本研究の目的は，第一に，教師からの受容と級友からの受容がクラスでの居心地感に与える影響の性差及び発達的変化を検討すること，第二に級友からの受容と教師からの受容に関連する性格特性の性差及び発達的変化について検討することであった。

**教師受容・級友受容・居心地感得点の性差，学年差の検討について**

教師受容得点と級友受容得点は，いずれにおいても男子に比べての女子の方が有意に高かった。戸ヶ崎・秋山・嶋田・坂野（1997）は，友だちとの関係，先生との関係，学業場面を下位尺度とした学校不適応感尺度を作成し，小学生を対象に性差と学年差の検討を行った。その結果，友だちとの関係，先生との関係については，女子の方が男子よりも不適応得点が低いことを明らかにした。これらの結果から，男子よりも女子の方が，教師や級友との関係が良好であり，彼らから高い受容感を感じていと考えられる。

教師受容得点では，学年による差がみられ，小４は中２，小５よりも有意に高かった。小学校４年生は，中学年という段階であり，他の学年よりも特に教師が重要な存在であり，大人からの評価に依存しやすい傾向にあるということが考えられる。また，小学校では，学級担任制であるのに対し，中学校では，教科担任制をとっている。教師が児童生徒と関わる時間の差が，今回示された違いにつながると考えられる。一方，級友受容得点での学年差はみられなかった。これらの結果から，級友からの受容は教師からの受容に比べて学年の影響を受けにくく変化しにくいといえる。

居心地感得点では，男女差は認められず，小４が中２に比べて有意に高いという結果が示された。中学校２年生は一般的に，中だるみをする時期であるとされており，クラスや学校に対する関心が他の学年よりも低く，クラスでの居心地感は他の学年より感じにくかったのだと考えられる。林（2006）は，クラスを自分の居場所としている児童生徒は小学生から中学生にかけて緩やかに減少すること，相田（1989）は，学年が上がるにつれ「学校に行くのが楽しい」とする生徒の割合が減少することを示している。古市（2004）は，小中学生を対象に学校生活享受感情の規定要因とその性差，学年差について検討した。その結果，学校生活享受感情得点は学年の進行とともに平均点が低下すること，女子よりも男子の方が平均点が低いことを明らかにした。江村・大久保（2012）は，学校適応感の性差について検討し，適応感尺度の得点は男子に比べて女子の方が高いことを明らかにした。

このような研究から，学年が上がるにつれて居心地感得点は低下すること，男子よりも女子の方が居心地得点は高くなることが予想されたが，本研究においてそのような結果は認められなかった。本研究では，児童生徒の居心地感をクラスの中の居心地感に限定したことが影響していると考えられる。

**教師受容・級友受容が居心地感に及ぼす影響について**

まず，学校種別に考察を行う。中学校では，教師受容については男女とも有意な影響は認めらなかったが級友受容では有意な影響，小学校では，教師受容，級友受容いずれにおいても有意な正の影響がみられた。小学校では，教師からも級友からも影響を受け，中学校では，特に級友からの影響を強く受けるということが示された。古市（2004）の研究において，小学校の段階では，教師関係の良し悪しが学校生活の楽しさに影響を及ぼすことが明らかにされている。本研究では，教師からの受容感を測定する際に，「担任の先生から」という指定をした。小学校は学級担任制であり，中学校よりも担任教

師との関わりが深く，共に活動する時間が長いことから，教師との関係や受容が児童の居心地感に影響しやすいと考えられる。一方，中学校は教科担任制で，各教科の担任や部活動の担任など関わりのある教師の人数が増えるため，担任教師だけの影響は小学校よりも強くないことが考えられる。これらのことが，今回の差につながったのではないかと考えられる。

次に，性差についての考察を行う。本研究では，教師受容が居心地感に及ぼす影響については，小学校男子においてその影響が大きいことが示唆された。古市（2004）は，小学校 6 年生男子では，特に教師関係の程度が，学校生活享受感情に影響を及ぼしていることを明らかにしている。これらの結果から，小学校男子では，教師受容が居心地感に影響を与えると考えられる。

級友受容が居心地感に及ぼす影響については，男子よりも女子の方がその影響力が大きいことが示唆された。古市（2004）は，学校生活享受感情に及ぼす級友適応の影響は，男子よりも女子の方が強いということ示している。また，藤田・西川（1999）でも，女子の場合は，友だち関係が学校適応感に強く影響することが示されている。これらの結果から，女子にとっては，級友受容が居心地感に影響を与えると考えられる。女子は男子に比べて友人からの評価や付き合いを重要視しており，自分が級友から受け容れられていると感じることでクラスでの居場所を見い出していることが示唆される。

学校種別，男女別に考察をしてきたが，全体を通してみると，教師受容よりも級友受容が居心地感に強く影響を及ぼすことが示された。澤田（1991）は，高学年になるほど，社会性の発達に伴って，仲間や仲間集団からの受容や拒否，評価が各児童に及ぼす影響力は増大し，時として教師の影響力を上回ると指摘している。一般的に，児童期後期には，友人と一緒に活動する時間が増加し，仲間意識が芽生え，友人に対する親密度が高まる時期であるとされる。したがって，周囲の大人よりも友人からの評価の方が，児童にとって大きな意味をもつのだと考えられる。小中学校での，級友からの受容の重要性がうかがえる結果となった。

教師受容や級友受容の程度が居心地感や適応に影響を及ぼすという結果は，古市（2004）や藤田・西川（1999）らの研究でも明らかになっている。しかし，本研究の結果において注目すべき点は，教師受容が居心地感に及ぼす影響の程度がこれまでの研究よりも極めて小さい点である。教師は，子どもたちと接する際，より受容的な態度で接したり，積極的に賞賛したりしていくことが求められると言えるのではないだろうか。

**教師受容・級友受容に影響する性格特性について**

小学校，中学校のいずれにおいても，教師受容や級友受容には協調性が影響していることが示された。松山（1963）は，児童の学級集団の仲間の選択に対する判断基準には，第一に「協調性」が挙げられることを明らかにしている。また，高橋（1988）は，学級集団における友人選択傾向と性格特性に関する研究を行い，被選択と非協調性は負の相関を示し，学級集団内の友だちから好意的に思われることには，協調性という性格特性が大きく関わることを明らかにした。今回の研究で教師受容や級友受容には協調性が影響するという結果が得られたことは，従来の研究と一致する。明石（1995）は，クラスで好まれる児童の特徴について検討した。その結果，教師が好むのは，思いやりがあり，他人にいつも優しくできる子であることを示した。親切で思いやりのある態度は，教師からも級友からも受け入れられやすい特性であるといえる。

中学校女子では，教師受容に知的好奇心は影響しないが，小学校では女子において知的好奇心が教師受容に影響するという結果が得られた。小学校では，担任の先生は児童と多くの時間を過ごし，児童一人ひとりの学力を評価していく。授業中の様子を観察したり，ノートなどの点検を行ったりすることによって，児童一人ひとりの学習に対する意欲や関心，知識量をよく把握していると考えられる。これらのことから，小学校の児童は教師からの直接の評価を得られる機会が中学校よりも多いことが考えられる。知的好奇心は，学業に結びつきやすい特性であり，教育活動を進めていくうえで教師は知的好奇心を重視する可能性がある。そのため，教師受容と知的好奇心は関連を示すことが予測された。本研究では，それが中学校女子においては示された。しかし，小学校男子では，教師受容に知的好奇心の影響がみられなかった。男子は女子ほど教師からの評価に依存しない可能性があることが考えられる。さらに，知的好奇心は，教師受容だけでなく小学校男女，中学男子において級友受容にも影響を与えていること示された。これは，従来の研究では示されていない新たな知見である。児童生徒はたくさんの知識をもっていることで友だちから頼りにされたり，認められたりしていることが考えられる。

攻撃性に関しては，仲間から拒否される行動特徴は攻撃性であると指摘してされているように（前田, 1999），攻撃性と級友受容との間には強い関連があると予測された。本研究では，中学生男子で攻撃性の低さが級友からの受容に影響を及ぼすことが示され，従来の研究と一致していた。しかし，その他の学年や性別では攻撃性と教師受容，級友受容との強い関連は示されなかった。今回の研究で取り上げた攻撃性尺度の中には，「人にらんぼうなことをしたことがあります」といった，身体的な攻撃の側面を含むものの他に，「嫌なことを言った相手には強く言い返します」といった自己主張の側面を含むものが含まれていた。自己主張を含む攻撃性は，人間関係に必ずしもマイナスな影響を及ぼすとは限らず，むしろ，プラスに働くことも考えられる。マイナスとプラスの面が相殺し合い，攻撃性と受容の関連がみられなかった可能性がある。

中学女子で，良識性が級友受容に影響することが示された。生徒の何事にも前向きに取り組んだり，責任をもったりする態度は級友からの受容につながることが明らかになった。一方で，教師受容への良識性の影響はみられなかった。本来，児童生徒のあきらめずに物事に取り組む姿勢というのは，教師が評価しやすい点であると考えられる。明石（1995）が行った研究で，教師が好む児童として，いつもまじめに努力している子が挙げられていることからも，良識性は教師受容に影響することが予想された。しかし，本研究では，そのような結果はみられなかった。このことから，教師は，良識性のある子どもたちを積極的に評価していない，あるいは，評価はしているものの子どもたちに伝わっていない可能性があると考えられる。

**本研究から得られる教育的示唆**

本研究の結果より，小学校では，教師や級友からの受容が，中学校では，級友からの受容が居心地感に影響を及ぼすことが明らかとなった。林（2006）も，「居場所」と感じるためには自分の居どころが定まっているだけでなく，他者から受容されていると感じることが大切であると指摘している。また，林（2006）が小中学生を対象に行った学校生活に関する調査の結果では，学級を居場所であると感じていない児童生徒が，小学生で 36.2%，中学生で 41.4%いることが明らかとなっている。

これらのことから，児童生徒が教師や級友から受容されているという感覚を高めることを通して居場所づくりに取り組んだり，教師の日々の児童生徒への関わり方を見つめ直したりする必要があると考えられる。具体的には，教師が児童生徒への関わりを増やしたり，級友同士の関わりを増やしていくなかで，児童生徒が自分の力を発揮し肯定的な評価を得られたりするような機会をより一層多く設けたりすることが考えられる。担任教師が児童生徒一人ひとりを理解しようと努めながら，クラス内の児童生徒どうしの人間関係のつながりを強くしていったり，児童生徒の目線に立って接していったりすることの重要性が改めて示されたといえる。

本研究では，中学校で，教師受容よりも級友受容の方が居心地感に強く影響を及ぼすことが明らかとなった。しかし，中学校において教師からの受容が重要ではないということではない。今一度，教師の生徒との関わり方を見直す必要があると言える。中学校でも教師が今まで以上に子どもたちに積極的に関わっていくことが必要であり，教師による児童生徒理解のための日々の努力は必要不可欠である。

また，本研究では，教師受容や級友受容には児童生徒の様々な性格特性が関連していることを明らかにした。受容に関連する性格特性を事前に知ることで，どのような働きかけが必要であるのかを考えることができる。例えば，教師からの受容を低く感じやすい性格特性をもつ児童生徒には，より児童生徒の視点に立って寄り添っていくこと，級友からの受容を低く感じやすい性格特性をもつ児童生徒には，その児童生徒の友人関係に特に目を向け，支援していくことが必要であると考えられる。そして，教師からの受容と級友からの受容に関連する性格特性は必ずしも一致するわけではないという視点を提供した。このことを教師が理解することで，教師自身が広い視点をもつこと，児童生徒を多面的に捉えていくことにつながると考えられる。児童生徒のもつ個々の特徴を周囲の大人が理解し，児童生徒が受容を感じられる取り組みや活動を行っていくきっかけを作ることができると考えられる。

本研究の結果で，教師受容と良識性の関連がみられなかったことは注目すべき点である。教師は子どものあきらめずに物事に取り組む姿勢を積極的に評価できていない，あるいは，評価しているものの児童生徒に伝わっていない可能性がある。教師は，児童生徒の様子をしっかりと把握し，その場に応じた声かけや賞賛をしていく必要があり，彼らに合った評価の仕方を見つけていくことが大切なのではないだろうか。

**本研究における問題点と今後の課題**

本研究における問題点と今後の課題について，３点指摘しておく。

１点目は，教師や級友からの受容や児童生徒の性格特性が質問紙を用いた主観的な回答結果であった点である。今後は，現場の先生方に，クラス内で受容されやすい児童生徒についてインタビュー調査や，観察法での調査によって，客観的に測定をすることが求められる。こうした点に配慮して更なる実態に迫っていく必要があるだろう。

２点目は，学級の雰囲気による違いに考慮しなかった点である。弓削・甘利（2004）は，同じように問題行動を起こす児童であっても，その児童が所属する学級集団の雰囲気によって教師や他児童から好感をもたれたり，もたれなかったりすることを指摘している。したがって，教師や級友からの受容を考える際には，そのクラスの雰囲気という観点を踏まえる必要があると考えられる。今後は，クラスの雰囲気によって，教師や級友から受容される性格特性はどのように異なるのかの検討を行うことが必要である。

３点目は，教師や級友からの受容に関連する要因として，性格特性を取り上げてきた点である。性格特性を変容することは容易ではない。また，教師や級友からの受容には児童生徒の社会的スキルや学業スキルなども影響を及ぼすことが考えられる。スキルといった変容可能な側面が教師や級友からの受容とどのような関連を示すのかを明らかにしていく必要がある。

## 引用文献

明石要一（1995）．　教師の好みと子どもの人気のズレ（人気のある子 ＜特集＞）　児童心理，*49*，1047-

1052.
江村早紀・大久保智夫（2012）．　小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討　発達心理学研究，*23*，241-251.
林　幸子（2006）．　「居場所」としての学級―小・中学生の学校生活の実態から　大阪大学教育学年報，*11*，115-127.
藤田正・西川潔（1999）．　他者からの受容感と学校が楽しい理由について　奈良教育大学研究所紀要，*35*，95-102.
古市裕一（2004）．　小・中学生の学校享受感情とその規定要因　岡山大学教育学部研究収録，*126*，29-34.
小石寛文・片山絢子・八幡佳英・長瀬善雄（1993）．　小学校低学年児のソシオメトリック地位の安定性と仲間関係スキルとの関係　神戸大学発達科学部研究紀要，*1*，77-86.
前田健一（1994）．　子どもたちの友達関係をどうとらえるか　児童心理，*622*，109-115.
前田健一（1999）．　児童期の社会的タイプと行動特徴に関する発達的変化　愛媛大学教育学部紀要，*46*，25-35.
松山安雄（1963）．　学級における社会的地位と行動特性の研究　大阪学芸大学紀要，*5*，12-24.
村上宜寛・畑山奈津子（2010）．　小学生用主要 5 因子性格検査の作成　行動計量学，*37*，93-104.
文部科学省（2017）．児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査.
澤田秀一（1991）．　仲間関係の発達における留意点　児童心理，*45*，995-1001.
鈴木翔（2012）．　教室内カースト　光文社.
高橋宗（1988）．　学級集団における友人選択傾向と性格特性に関する一考察　聖泉短期大学人文・社会科学論集，*3*，1-10.
戸ヶ崎泰子・秋山香澄・嶋田洋徳・坂野雄二（1997）．小学校用学校不適応感尺度開発の試み　ヒューマンサイエンスリサーチ，*6*，207-220.
弓削洋子・甘利明子（2004）．　目立つ児童の研究―児童への教師の評価を規定する教師と児童の関係性―　鳴門教育大学研究紀要，*19*，49-56.

## 付　記

本研究は第二著者の指導のもと第一著者が平成 27 年度愛知教育大学に提出した卒業論文に加筆修正を加えたものである。

ご多忙にも関わらず，調査にご協力くださり，尺度についてご助言を下さいました小中学校の先生方に心より感謝申し上げます。また貴重な時間を割いて調査に回答してくれた児童生徒の皆様に心より感謝申し上げます。